

## 着任のごあいさつ

林産試験場長 菊地伸一

木材利用の可能性が広がっています。

1980年代後半、大断面集成材を用いることで、高さ13m以上の木造建築物が建てられるようになりました。現在、規模の大きい木造の体育館やホール、展示館といった建築物を数多く目にすることができるようになっています。

1990年代、3階建ての共同住宅が木造で建築可能となりました。現在、鉄骨造やRC造に対抗できる構法の選択肢の一つとして定着し、道内においても広く建設されています。

2000年代に入ってから、4階建て以上の建築物、高い安全性が必要な養護施設などの建築物、さらに駅周辺など繁華街の建築物も、全て木造とすることが可能となりました。



私は、1980年代に木材の防耐火性能の向上に関する研究、技術開発に取り組みはじめました。当時、木材を建築材料として使うことにはきわめて厳しい防火制限がありました。上で述べたような木造建築物は、どれもこれも、その時代には、法制度の面でも、技術の面でも、また、費用の面でも、実現の見通しのつかないものでした。

その一方で、海外からは4階建て木造などが聞こえていました。また、北欧、北米の大規模建築物についての現地研修の機会を得て、延べ床面積が1万m<sup>2</sup>を越える3～4階建ての木造共同住宅や、5階建の木造ビルが建築されていることを知りました。

今、それらの建築物は日本で実現できます。それは、木材の研究者が、建築の研究者が、一步一步、木材の燃焼性を調べ、優れた防火薬剤を開発し、無機材料との複合化技術を開発し、燃え広がりを抑える構法を開発する、そういった取り組みが実を結んだ、ということなのだろうと思います。技術開発の積み重ねが木材の新しい利用分野を切り開いた、ということなのだろうと思います。

このこと、すなわち技術開発の積み重ねがもたらす果実は、言うまでもなく防耐火性能の分野に限ったことではありません。品質を安定させる乾燥技術、強度の高い材料の製造技術、耐久性を高める技術、効率的な加工技術、信頼性の高い評価技術、等々。私たち林産試験場は、技術開発が開く大きな可能性をこれからも信じて、研究に、技術開発に取り組んでいきたいと考えます。

企業、関係団体の皆様からは、多くの要望をいただいています。平成25年度、林産試験場は68の研究課題に取り組みました。研究員が61名ですから、1人が1課題以上分担し、企業、関係団体の皆様に支えていただきながら実施してきました。迅速な技術開発、スピード感ある対応、が必要であることは論を待ちません。その一方で、決して拙速であってはならないと考えています。研究者の、研究成果の、ひいては研究機関の質が問われる時代に入っています。常に、高い品質・レベルを維持しつつ、稚拙にならず、成果を世に出していきたいと考えています。

林産試験場を、ご指導・ご協力を、よろしくお願い申し上げます。